

選言主義と感覚的視覚的想像

横山 幹子*

Disjunctivism and Sensory Visual Imagination

Mikiko YOKOYAMA

抄録

われわれは世界についての知識にどのようにして到達できるのか。パトナムは、自然な実在論がその問題に答えられると主張し、その立場から、知覚についての選言的見解を受け入れることを提案する。フィッシュは、「選言主義と非選言主義：論争を理解するために」の中で、選言主義者と非選言主義者の論争の本質を明らかにする必要があると論じる。そして、彼は、その論争は、内省的状態の存在に関する論争ではなく、内省から得るものの地位に関する論争だと主張し、その論争は感覚的視覚的想像の認識論的分析によって前進するべきだと提案する。マーティンやノードホフは、そのような認識論的分析によって選言主義を擁護している。しかし、彼らの論拠は互いに異なる。本論文では、彼らの議論を検討する。そのため、まず、「経験の透明性」でのマーティンの考えと、「対象を想像することと経験を想像すること」でのノードホフの考えを概観する。次に、彼らの論争を整理する。それから、ノードホフのマーティンへの批判には適切な点もある一方で、不十分な点もあると論じる。そして最後に、感覚的視覚的想像の認識論的分析により選言主義を擁護するためには何が重要かを素描する。

Abstract

How can we achieve knowledge about the world? Putnam claims that natural realism can reply to the question. From this point of view, he proposes that we accept the disjunctive view of perception. Fish claims in “Disjunctivism and Non-disjunctivism: Making Sense of the Debate” that we need to elucidate the nature of the dispute between disjunctivists and non-disjunctivists. He argues that it is not the dispute over the existence of an introspective state, but the dispute over the status of what we learn from introspection. He suggests that the dispute should be taken forward by analyzing the epistemology of sensory visual imagination. By analyzing the epistemology, both Martin and Noordhof argue for disjunctivism. Their arguments, however, are different from each other. This article examines this dispute. First, I will review both Martin’s idea in “The Transparency of Experience” and Noordhof’s idea in “Imagining Objects and Imagining Experiences”. Next, I will organize the dispute. Then, I will argue that while some of Noordhof’s objections against Martin are adequate, some of them are inadequate. Finally, I will outline what is important when arguing for disjunctivism by analyzing the epistemology of sensory visual imagination.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media studies, University of Tsukuba

はじめに

われわれが直接知覚しているのは外界自体ではなく何らかの内的なものであり、われわれは外界を間接的に知覚しているのだという考えは、われわれにはなじみのものである。しかし、パトナムは、外界の知覚を説明するためにそのようなものを考えることにより外界とわれわれの認識がどのように結びつくのかわからなくなるので、そのような媒介物を考えることをやめ、われわれが直接知覚しているのは外界自体だと考えるべきだと論じ、自然な実在論を主張している。彼によれば、「成功した知覚とは、『外にある』実在の諸側面を感じること (*sensing*) であり、それらの諸側面によってある人の主観性に引き起こされた単なる影響ではない」¹のである。しかし、われわれには錯覚や幻覚がある。そのことをどのように説明するのだろうか。それに答えるために彼が提出しているのが、マクダウエル流の選言主義²であると考えられる。つまり、「両方の場合(知覚と幻覚等)に、私が『私は壁がバラで覆われているのを見た』と記述したと言うとき、私が推論してよいのは以下の選言が真であるということだけである。(D) 私は壁がバラで覆われているのを実際に見たか、私は壁がバラで覆われているのを見たかのように見えた (*seemed*) のかのどちらかである」³と言うことによって知覚と幻覚等を区別するのであり、知覚と幻覚等は同じものを知覚しているからそれらを区別できないのではないとするのである。

そのような知覚に関する選言主義と、それを否定する知覚に関する非選言主義の論争をどのように理解すべきか、という問題に関して、フィッシュは、彼の論文「選言主義と非選言主義: 論争を理解するために」⁴の中で論じている。彼によれば、知覚の選言主義者も非選言主義者も、「Sには、自分が対象Oを知覚しているかのように見える (*looks*)」のような現象を表す言明は、Sが現実的にOを知覚しているということを含んでいないということを知覚しているか、その人にとって単にそのように見える (*seems*) だけかのどちらかだ」の省略として選言的に理解されるべきであり、それは二つの異なる事態のいずれかによって真とされることができると考える一方で、非選言主義者が、そのような言明はある感覚的状態の存在によって真とされることができると考える点にある。彼によれば、その論争は、内省的にそのような経験があるかどうかについての論争ではなく、方法論に関する論争、つまり、主体が区別できない経験

の場合それらを同じものとして分類しようという決定原則の受け入れを巡る論争である。そして、この決定原則を受け入れるのが非選言主義であり、受け入れないのが選言主義である。したがって、幻覚と知覚に共通の内省的状态があるかどうかを尋ねることによっては、選言主義と非選言主義の論争に決着をつけることができない。彼によれば、その論争を前進させる一つの方法は、選言主義と非選言主義のどちらが感覚的視覚的想像についての認識論に満足のゆく分析を与えるかを考察することなのである。

感覚的視覚的想像についての認識論を考えることにより選言主義を擁護しようとする人物にマーティンがいる。彼は、その論文「経験の透明性」⁵の中で、感覚的視覚的想像について考察することにより、知覚について選言的アプローチをとることが適切だと示そうとしている。また、ノードホフは、その論文「対象を想像することと経験を想像すること」⁶の中で、同じく選言主義を擁護しようとしながらも、そのようなマーティンの議論に反論している。本論文では、選言主義と非選言主義のどちらがわれわれの知覚についての適切な意見なのかを考えるとき感覚的視覚的想像についての考察を手がかりにすることができるというフィッシュの考えを前提としたうえで、感覚的視覚的想像を巡るマーティンとノードホフの論争を検討することによって、選言主義の擁護について考えたい。

そのためにまず、第二章では、「経験の透明性」におけるマーティンの見解をまとめる。次に、第三章では、「対象を想像することと経験を想像すること」におけるノードホフの、マーティンの考えへの批判を概観する。それから、第四章では、マーティンとノードホフの論争の論点となっているところはどこかを整理する。そして最後に、第五章では、ノードホフのマーティンへの批判のどこが適切でどこが不適切かを指摘し、感覚的想像を考えることによって選言主義を擁護するためには何が必要かを明らかにする。

2. マーティンの主張

「経験の透明性」の中で、マーティンは、感覚知覚 (*sense perception*) についてどのように考えるべきかを論じている。具体的には、彼は、三つの説をあげ、どれももっとも適切に思えるかを論じているのである。彼のあげている三つの説は、以下のものである。

第一番目の説は、センスデータのアプローチである。マーティンはそれを次のように説明している。「一つの

極端な考えは、経験の性格は全く主観的であり、経験は、われわれの周りの世界の中の対象とは同一とは考えられない、ある種の非物理的な実体、もしくは心に依存した実体、センサーデータについての気づきを含んでいる。もしくは、ある種の主観的な質、クオリアあるいは感覚質についての気づきを含んでいるというものである。それらの経験は、心から独立した世界についてのものではなく、その性格は表象的 (representational) ではない。⁷つまり、センサーデータのアプローチによれば、われわれの知覚の直接の対象は、センサーデータのような何らかの主観的なものであり、それはわれわれの周りの世界の中の対象をそのまま写しているものではないと考えられるのである。

第二番目の説は、志向的アプローチ⁸である。マーティンはそれを次のように説明している。「もう一つの極端な考えは、われわれの経験は心から独立した世界の表現であり、他の何ものの表現でもない、そして、それは、その性格が表象的、もしくは、志向的である経験のためによってそうでありうるという考えである。」⁹つまり、志向的アプローチによれば、われわれの経験は、われわれの周りの世界の中の対象をそのまま写しているのである。この場合は、内的気づきの対象として、表象的なものや性質を想定する必要はない。外的対象だけが、経験を内省する際に心に現れているものである。そして、幻覚や幻影の場合に関しても、心から独立した対象が現れている。知覚との違いは、それらが実際に存在するのではなく、単に志向的に存在しているという点にある。

第三番目の説は、素朴实在論であり、選言的アプローチである。マーティンはそれを「人の経験は、人を心から独立した世界に関係させるが、それは非表象的なやり方である」¹⁰と考えるものだと説明する。つまり、素朴实在論によれば、知覚の対象は知覚的経験の側面であり、われわれの経験は心から独立した対象についてのものである。そして、素朴实在論の立場をとったまま錯覚や幻覚を説明するのが、選言的アプローチなのである。選言的アプローチによれば、知覚の場合も幻覚の場合も主体にとっては同じように見えるという状況は否定されないが、それは、主体の視点から知覚と錯覚や幻覚が区別されることができないと言うだけであり、共通の説明が与えられなければならないということを主張するものではない。錯覚や幻覚は、知覚から区別できないと言うことによって説明される。

マーティンは、以上のセンサーデータのアプローチ、志向的アプローチ、選言的アプローチのどれがわれわれの感覚知覚についての説明として相応しいかを、現象的透

明性からの議論 (the argument from phenomenal transparency) に焦点を当て考察する。彼によれば、現象的透明性とは、「人の知覚的経験の内省は、心から独立した対象、質、関係だけを示し、それらについて、人は知覚を通して学んでいるということ」¹¹を意味する。それは、人の経験は知覚の対象に対して透明だという考えであるので、現象的透明性と言われる。現象的透明性からの議論とは、この現象的透明性を守りたいとするならば、センサーデータのアプローチ、志向的アプローチ、選言的アプローチのどれがわれわれの感覚知覚についての説明として相応しいかを考察するものである。¹²

現象的透明性からの議論において最初に検討されるのは、知覚的経験に対してこの現象的透明性を説明できるのはどれであるかということである。マーティンによれば、センサーデータのアプローチでは、それを説明できない。なぜなら、まず、第一に、内省によっては、主観的な質、クオリアあるいは感覚質のようなものがあるようには思えないからである。そして、第二に、内省によれば、心から独立した対象をわれわれが経験しているように思えるので、われわれはそのことを説明しなければならないが、センサーデータのアプローチではそれを説明できないからである。それに対して、志向的アプローチも選言的アプローチも、その現象的透明性を説明できる。なぜなら、まず、第一に、志向的アプローチも選言的アプローチも、非物理的な実体や質がないことを認めることができるからである。第二に、志向的アプローチは、われわれの経験が心から独立した対象についてのものであるということを経験の表象的性質によって説明することができるし、選言的アプローチは、それを知覚の対象が知覚経験の側面であるということによって説明することができるからである。¹³

以上のように、知覚的経験に対する現象的透明性からの議論でも残るものは、志向的アプローチと選言的アプローチであると、マーティンは主張する。そして、そのことは、知覚的経験に対する現象的透明性からの議論では志向的アプローチと選言的アプローチの間の優劣を付けることができないということを示している。それゆえ、彼は、両者に優劣を付けるために、次に、感覚的想像に対する現象的透明性からの議論を行うのである。

ただし、マーティンによる感覚的想像に対する現象的透明性からの議論を見る前に、その議論の中で問題になる、志向的アプローチと選言的アプローチの違いを確認しておくことが、役に立つ。それゆえ、まずそれを確認した後で、彼の感覚的想像に対する現象的透明性からの議論を見ることにする。

マーティンによれば、志向的アプローチと選言的アプローチは、知覚的経験の直接性についての、つまり、われわれの経験が心から独立した対象についてのものであるということについての、説明の仕方が異なっていた。選言的アプローチによれば、知覚的経験の透明性や直接性は、知覚的経験が主体と知覚の対象やその特徴との間の現実の関係を含むと考えることによって説明される。知覚と錯覚と幻覚には、共通の説明はない。錯覚や幻覚は、主体の視点からは正確な知覚の場合と区別できないというだけである。それに対して、志向的アプローチによれば、知覚的経験の透明性や直接性は、経験の表象的性質によって説明される。その考えによれば、知覚の場合も幻覚の場合も、同じ事柄の状態を表象しているが、幻覚の場合は、それらが実際に存在することを要求していないのである。

以上のように、志向的アプローチと選言的アプローチの違いを考えた場合、感覚的想像に対する現象的透明性からの議論は、どちらのアプローチがより適切だと示すのだろうか。マーティンは、「感覚的に想像すること」の中でも「視覚化すること」、「視覚的に想像すること」をとりあげ、それを説明するとき志向的アプローチだとくまなく選言的アプローチならくまなくいくので、感覚知覚についての説明としては選言的アプローチが優れていると主張している。その際、彼は、まず、感覚的想像に対する「依存性のテーゼ」(Dependency Thesis)を導入する。そして、次に、依存性のテーゼが正しいとするならば感覚的想像に対してもある程度現象的透明性が成り立つと論じる。それから、感覚的想像に対するそのような現象的透明性が成り立つならば、その現象的透明性を説明することができるのは、選言的アプローチだと論じるのである。ここではそれを順に見ていきたい。

まず、「依存性のテーゼ」とはどのようなものが問題である。マーティンによれば、依存性のテーゼとは、「感覚的に ϕ を想像することは、 ϕ を経験していると想像することである」¹⁴というテーゼである。つまり、 ϕ を想像することは、 ϕ の感覚的経験を想像していることであるというのである。たとえば、リンゴを視覚的に想像するときは、リンゴの視覚的経験を想像している。このテーゼに従えば、想像するという出来事は、感覚的経験を対象として持つのである。彼は、このテーゼを擁護するために、感覚的に想像することの中心な場合である視覚化¹⁵について、依存性のテーゼが正しいと示そうとする。彼によれば、われわれは現実のかゆみを持つことなく、かゆみの感覚を想像することができる。それと同様に、視覚的経験についても、われわれは視覚的経験の

実例を持つことなく、視覚的経験を想像することができるのである。そして、感覚的経験の想像がその経験的特徴の実例を含む必要はないということは、依存性のテーゼが主張していることである。そのうえ、視覚化はある視点からのものであるという特徴を持つが、それを説明するためにも、想像するということが感覚的経験を対象として持つと考えた方がよい。なぜなら、「人がシーンの内部で視点を想像しなければならないなら、人はシーンの内部で経験を想像しなければならない」¹⁶からである。つまり、視覚化する際の視点は現実ではなく想像された状況に関係しているからである。

次に、マーティンは、依存性のテーゼが正しいとするならば感覚的想像に対してもある程度現象的透明性が成り立つと論じる。つまり、ある程度現象的透明性が成り立つということは、感覚的経験を想像するということの現象的性格であると言うのである。

マーティンは、感覚的想像に対してもある程度現象的透明性が成り立つということを、感覚的経験を想像することの一つである「視覚化すること」の考察で、示そうとする。彼によれば、太平洋を視覚化しているとき、青い広がりを想像しているのだから、その意味では、視覚化は視覚的経験と同様に透明である。また、水の青い広がりの視覚化が、水の青い広がりの視覚的経験のようには現実の環境についての信念や行為に直接の影響を与えず、視覚的経験のような直接性が認められないとしても、そのことは、視覚化が想像された状況に関して中立的な立場にあるということの意味しない。例えば、水の広がりの視覚化の場合、想像された状況が水の青い広がりを含むかどうかに関与している。そのうえ、家具屋で家具を見て自分の家に入るかどうかを想像し、その結果、その家具が自分の家に入るかどうかを決める場合のように、「このように視覚化することは、想像された状況について人が受け入れているもの、したがって、人が可能だと信じるようになるものにとって、帰結を持ちうる」¹⁷。つまり、視覚化することは、太平洋の視覚化で示されるように、内省的に媒介を欠くという意味で直接的であり、また、家具屋の例に見られるように、想像された状況に関して、非中立的である。

以上のように、感覚的想像に対する現象的透明性が成り立つならば、志向的アプローチと選言的アプローチのどちらが、その現象的透明性を説明することができるのだろうか。

選言的アプローチは、この状況を次のように説明する。正確な知覚の視覚的経験は、経験の構成要素として、その知覚の対象を含むので、経験は、事物が環境の

中でどうあるかについての信念に影響を与えることができる。人が対象を視覚化するとき、人は、そのような視覚的経験を想像している。そして、そのような経験は構成要素として経験の対象を持っているので、想像された状況に対してその人がとる現実の態度は、現存しているそれらの対象に対する態度である。そう説明するのである。

けれども、志向的アプローチでは、感覚的に想像することの先の現象的性格を説明することができない。マーティンによれば、志向的アプローチでは、想像された状況に対する非中立性を説明できないのである。なぜなら、依存性のテーゼが与えられるなら、視覚化しているとき人は視覚的経験を現実を持っているのではなく、そのような経験を想像しているだけであるが、志向的アプローチでは、感覚状態の対象を表象的なものと考え、対象の現存を要求しないので、想像された状況においてどのような態度があるかを言えるだけであって、どうしたら現実の態度に影響を与えられるか、人の信念に影響を与えられるかを説明できないからである。

以上のように、感覚経験の透明性を考えるならば、センスデータのアプローチが不適切で、志向的アプローチか選言的アプローチが適切ということになるが、依存性のテーゼが正しいと考え、感覚的想像に関してもある程度透明性が成り立つと考えるならば、志向的アプローチはそれを説明できず選言的アプローチはそれを説明できるので、知覚について考える際には選言的アプローチが適切だと、マーティンは論じるのである。

3. ノードホフの考え

ノードホフは、「対象を想像することと経験を想像すること」の中で、依存性のテーゼを否定し、その代わりに、「率直な見解 (Straightforward View)」をとるべきことを主張している。そして、そのうえで、それらと選言主義とのかかわりについて述べている。ここでは、まず、彼が「依存性のテーゼ」、「率直な見解」、「多様使用のテーゼ」でどのようなことを考えていたかを示す。次に、それらの概念を使って、われわれの想像的企ての本質を考えた場合依存性のテーゼより率直な見解が適切であるという彼の三つの議論をそれぞれ説明する。それから、心的イメージの本質を考えた場合も依存性のテーゼより率直な見解が適切であるという彼の議論をまとめる。そして、最後に、依存性のテーゼと選言主義を結びつけることはできないという彼の主張を見る。

まず、ノードホフは、ピーコックの考え¹⁸を参照し、

マーティンが依存性のテーゼと名づけたものがどのようなものであるかを確認することから始める。ノードホフによれば、依存性のテーゼとは、「(D) SがあるF (もしくはそのF) を感覚的に想像するなら、そのときは、Sは、想像の世界の中で、内側から、あるF (もしくはそのF) を知覚的に経験していることを、感覚的に想像している」¹⁹ということを主張するテーゼである。その考えによれば、たとえば、椅子を想像するとき、椅子を想像しているのではなく、椅子の知覚的経験を想像していることになる。

次に、ノードホフは、率直な見解がどのようなものを述べる。彼によれば、「率直な見解とは、Fを想像することは、単にFを想像することであり、Fの知覚的経験を想像することを含まないという考えである」²⁰。つまり、その考えによれば、たとえば、椅子を想像するとき、椅子の知覚的経験ではなく、まさに椅子を想像しているのである。

そして、それから、ノードホフは、「多様使用のテーゼ (Multiple Use Thesis)」について説明する。彼の言う多様使用のテーゼとは、「同じ心的イメージは、異なる想像的企てを満たすために使われてよい」²¹という考えである。つまり、異なる想像的企てをするために、同じ心的イメージを使うことができるという考えである。例えば、スーツケースを想像するという想像的企てをするときわれわれが持つ心的イメージと、スーツケースの後ろに隠れた猫を想像するという想像的企てをするときわれわれが持つ心的イメージは同じでありうるのである。

以上のようにそれらの概念を説明したうえで、ノードホフは、まず、多様使用のテーゼが成り立つことを前提にわれわれの想像的企ての本質を考えた場合率直な見解が適切であるということ論じる。そして、それを主張するために、ノードホフが提出している一つ目の議論が、「意図された内容からの議論 (the argument from intended content)」である。

ノードホフは、例えば、「スーツケースを想像していること」と「スーツケースの後ろに隠れている猫を想像していること」という二つの想像的企てには、同じ心的イメージが使われているので、イメージ以外にそれらの想像的企てを区別するほかの要因がなければならないと言う。そして、彼によれば、そのほかの要因としてまず考えられるのが、われわれが持つ意図である。そのように、われわれの意図が、何が想像されているのかを決めるのに役立つという仮定を受け入れるなら、彼が「意図された内容からの議論」と呼ぶ、次のような議論が成り立つというのが彼の考えである。

- (1) ある主体SがFを感覚的に想像しようとし、この想像的企てに役に立つような像をうまく生み出そうとすることは、可能である。そして、その想像することが、内容を担ったSの心的行為であることは可能である。
- (2) 内容を担う成功した心的行為は、それが独立に持ったり、内容を運んでいるその背後にある意図の内容によって与えられたりするものよりもより深い内容には、寄与しない。

それゆえ

- (3) 対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はない。²²

彼によれば、意図は、イメージを生み出している人の自分の意図についての知識によって決定される。われわれが、例えば、椅子を感覚的に想像しようとしているとき、椅子を想像しようとしている。椅子のイメージを形成する際に、椅子の知覚的経験を想像していると信じる必要はない。Fを知覚していると想像しようと思図しなくとも、Fを想像することを意図することができるのである。

ノードホフによれば、上記のような意図された内容からの議論は、成功した想像の場合に妥当するものである。しかし、成功しない想像や意図的でない想像もある。成功しない想像の場合、意図の内容は、想像的企ての内容を決定しない。意図的でない想像の場合、アピールすべき意図はない。それゆえ、それらの場合はどうなるかについても考察されなければならない。そのために彼は二つ目の議論を提出する。それが以下の議論（仮定からの議論（the argument from supposition））である。

- (1) 主体Sは自分が対象Fを想像していると仮定することができる。
- (2) 想像することは、イメージが独立して持つ意図的な性質、もしくは、イメージの背後にある仮定によって与えられた内容より豊かな内容を帰せられるべきではない。

それゆえ、

- (3) 対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はない。²³

彼によれば、(1)は、すべての人が、依存性のテーゼを受け入れているわけではないという単純な事実から生じる。そして、この仮定からの議論が示していることは、イメージがどのように生じるかに関する仮定が想像的企

ての内容を決定できるということである。

われわれの想像的企ての本質を考えた場合依存性のテーゼより率直な見解が適切であるというノードホフの三つ目の議論は、自閉症の人や小さい子や動物の場合を考察するものである。依存性のテーゼが正しいなら、想像する際には、知覚的経験の概念を持っていないが、自閉症の人や小さい子や動物が知覚的経験の概念を持っているかどうかは疑わしい。しかし、彼らが想像をしていると考えることは彼らの行動を説明する際に役に立つ。したがって、依存性のテーゼよりも率直な見解が適切である。彼はそう論じるのである。

このように、想像的企ての本質に関する考察により、依存性のテーゼより率直な見解が適切であると論じた後で、ノードホフは、次に、想像的経験（心的イメージ）²⁴の本質の考察により、二つの見解のどちらが適切かを論じようとする。その際、まず、彼は、心的イメージの特徴に関して、依存性のテーゼが主張していることを、以下のようにまとめる。

- (I) Fの心的イメージは、ある視点からのFの表象である。
- (II) 心的イメージは、知覚的経験の場合とは違って、感覚的質の提示（presentation）を含まない。
- (III) 同じイメージは、一つ以上の想像的企ての役に立つ。たとえば、Fを想像することとFの知覚的経験を想像すること。²⁵

ただし、彼によれば、依存性のテーゼを主張するからといって、上記の全てを主張しなければならないわけではない。彼によれば、ここにおいてなすべきことは、心的イメージに関して提出された上記の特徴のそれぞれについての考察である。つまり、それらの適切性や他のもので同じことが主張できないかを考察することである。

ノードホフは、まず、(I)に焦点を当てる。彼によれば、依存性のテーゼを唱えるピーコックは、知覚がある視点からのものであるから、感覚的想像もある視点からのものであると主張しているし、同じくマーティンも、想像的経験のパースペクティブの本質²⁶に注目している。しかし、この感覚的想像が常にある視点からのものであるという事実は、依存性のテーゼによらなくとも、別の仕方でも説明することができる。ここで、注目されるのが、似た内容の仮説（similar content Hypothesis）である。似た内容の仮説とは、感覚知覚の様態は感覚的に想像することの様態と現象的に似ているという考えである。それによれば、感覚的知覚も感覚的想像もパース

ペクティブ的な本質を持っているということは、類似性の例であると考えることができる。

次に、ノードホフは、(Ⅲ)について扱う。彼によれば、多様使用のテーゼは、依存性のテーゼの主張者と似た内容の仮説の主張者では異なって理解される。依存性のテーゼの主張者によれば、同じイメージが二つの想像的企てに使われることができるのは、二つの想像的企ての場合に同じ知覚的経験が生じているからである。似た内容の仮説の主張者によれば、同じイメージが二つの想像的企てに使われることができるのは、その二つの想像的企てが現象的に似ているからである。つまり、両者とも、Fを想像することは、Fの知覚的経験が持っているようなものを示していることを認める一方で、依存性のテーゼの主張者は、Fを想像することはFの知覚的経験を想像することであるので、そのような事態が生じると考え、似た内容の仮説の主張者は、それらが現象的に似ているので、そのような事態が生じると考える。両者は、想像された世界に知覚された経験があるかどうかという点に関して異なるのである。このように、多様使用のテーゼは、依存性のテーゼだけでなく、似た内容の仮説でも説明できる。そして、似た内容の仮説による説明は、率直な見解とも両立する。ここで、似た内容の仮説は依存性のテーゼを含んでいるとか、依存性のテーゼは似た内容の仮説により深い説明を与えると考え、依存性のテーゼを守ろうとすることも適切ではない。まず、第一に、似た内容の仮説が依存性のテーゼを含んでいるとは言えない。それは命題を楽しんでいることとそれを信じていることが現象的に似た内容を持っているとしても、思うことと信じていることが同一でないのと同様である。さらに、依存性のテーゼが似た内容の仮説により深い説明を与えとも言えない。なぜなら、たとえFを知覚していると信じていることが、Fを知覚することを心的状態の内容の部分として持つとしても、それは、Fを知覚していることと現象的に似ていないので、依存性のテーゼだけでは似た内容の仮説を説明できないからである。

最後に、ノードホフは(Ⅱ)について考察する。依存性のテーゼの主張者は、心的イメージが知覚的経験の場合とは違って感覚的質の提示を含まないということをして、依存性のテーゼが説明できると主張する。しかし、それは適切とは思えないというのが、彼の考えである。根本的な問題は、感覚の様態には様々なヴァリエーションがあるのに、それに統一した一つの答えを与えようとしていることである。そのうえ、痛みを想像することと痛みの経験は現象的に違うように思えるが、赤い対象を想像することと赤い対象を知覚することにははっきりした現

象的な違いがないように思える。つまり、Fを想像する場合とFの知覚的経験を持つ場合の現象的な違いにもヴァリエーションがあるのである。それゆえ、部分的な説明がなされなければならないが、依存性のテーゼではそれを与えることができず、それを与えることができるのは、率直な見解であると彼は考えるのである。

以上のように、(Ⅱ)に関しては依存性のテーゼではうまく説明できず、(Ⅰ)や(Ⅲ)という特徴を説明するために、依存性のテーゼが必須ではなく、それらを説明するための最初の一步として似た内容の仮説をとることができるのであれば、知覚的経験の本質を考察するならば依存性のテーゼが適切だと考えることは間違っているというのが、ノードホフの考えなのである。

しかし、マーティンは、われわれが選言主義を支持する議論を、依存性のテーゼを主張することによって行っていた。それゆえ最後に、ノードホフは、マーティンの議論を整理したうえで、依存性のテーゼと選言主義を結びつけることはできないと主張する。

ノードホフによれば、選言主義とは、知覚・幻覚・錯覚の際に共通の種類 of 心的状態があると考えのではなく、それらの場合に少なくとも二つのタイプの心的状態があるということ認めるべきだという考えである。そして、彼によれば、マーティンは、以下の三つの命題を考察することによって、選言主義を支持できると考えていた。つまり、「(1) もしSがFを想像するなら、FはSの想像的世界の中に存在する。(2) Sが想像的世界において内部からFを知覚的に経験しているときにのみ、SはFを想像している。(3) Fの知覚的経験は、Fが存在することを含まない」²⁷という命題を考察することによって、選言主義を支持できると考えていた。(1)が正しいなら、(2)もしくは(3)が否定されなければならない。(3)の否定は選言主義になるので、(2)が否定されることができないなら、選言主義は擁護される。マーティンは、依存性のテーゼを擁護することによって選言主義を擁護しようとする。そして、依存性のテーゼが偽ならその擁護は失敗する。

しかし、依存性のテーゼと選言主義を結びつける必要はないと、ノードホフは主張する。彼によれば、その際着目されなければならないのは、マーティンが説明されなければならないと考えている想像的経験の認識論である。そして、そこでの問題は、どのようにして想像的経験と現実の世界との関わりを説明するかということなのである。

マーティンは、依存性のテーゼを維持する一方で、選言的アプローチをとることにより、この想像的経験の認

識論を理解しようとする。しかし、依存性のテーゼを維持したままそのようなことができるかは明らかではない。ノードホフは次のように論じている。依存性のテーゼが真であるなら、Fの経験があるからFが想像的世界の部分として存在しうる。つまり、想像的世界の存在は経験の存在に依存している。そのような世界は、事物の存在やあり方は主観の認識によって規定されるという意味で、観念論が真である世界である。そのように、依存性のテーゼは想像された世界についての観念論を含むと考えられる。それに対して、選言主義者は心から独立した世界があると考えている。それゆえ、依存性のテーゼを維持したまま選言的アプローチをとることはできないのである。

ここで、依存性のテーゼが関係している経験は世界が主体に表している経験だとして、依存性のテーゼが観念論を含むという仮定が間違っているとしてもうまくいかない。なぜなら、経験は世界が主体に表している経験だとするためには、想像している人が、自分たちが知覚的経験を持っていると仮定していて、その経験は経験の対象についてのものであると考えていなければならないが、人々は対象を想像していると考えているのであって対象の経験を想像していると考えているのではないからである。

以上のように、ノードホフによれば、マーティン自身が言っている想像的経験の認識論が説明されるべきであるなら、依存性のテーゼと選言主義を結びつけることはできない。しかし、率直な見解をとるならば困難を回避できると彼は言う。彼によれば、想像的経験の認識論を説明するためには、率直な見解を採用しなければならないのである。

4. 二人の対立のポイント

今まで、「感覚的に想像すること」を考えることによって選言主義の適切性を考察している二つの立場を見てきた。マーティンは、選言主義は知覚的経験の現象的透明性を説明できるだけでなく、感覚的想像に対する現象的透明性も説明できると論じることにより、選言主義を擁護していた。彼によれば、依存性のテーゼが正しいとするならば感覚的想像に対してもある程度現象的透明性が成り立つのであった。それに対して、ノードホフは、感覚的想像に関して依存性のテーゼを主張することを批判し、率直な見解を主張していた。そして、彼によれば、依存性のテーゼが間違っているからといって、選言主義が間違っているわけではなかった。マーティンと

ノードホフの論争について批判的に考察する前に、二人の論争を整理しておくことが必要である。それゆえ、具体的な考察に入る前に、ここでは、マーティンとノードホフの意見の違いがどこにあるかを簡単に整理しておきたい。

まず、一つ目の問題は、依存性のテーゼの正しさを巡るものである。

マーティンは、感覚的に想像することの中心的な場合である視覚化について、視覚的想像の場合に視覚的質の提示を含む必要がないということ、想像的経験にはパースペクティブ的な本質があるということを論じることにより、依存性のテーゼの正しさを示そうとしていた。

それに対して、ノードホフは、依存性のテーゼが正しいとは限らないということを論じていた。その際の彼の戦略は、想像的企ての本質を考えることと、想像的経験・心的イメージの本質を考えることの二つの方向性を持っていた。そのうち、想像的企ての本質の考察による依存性のテーゼ批判は、マーティンの論拠とは独立に挙げられたものであった。一方、想像的経験・心的イメージの本質を考えることによる依存性のテーゼ批判は、先に挙げたマーティンの二つの論拠への批判を含んでいた。そしてその他に、マーティンの論拠にはなかった、依存性のテーゼが正しいと考える人がとりうる論拠への批判をも含んでいた。それは多様使用のテーゼをどのように理解するかという視点からなされていた。

もう一つの問題は、依存性のテーゼが正しいとした場合の議論についてである。

マーティンによれば、感覚的経験の想像は、想像された状況に関して非中立的であった。家具屋で家具を見て自分の家に入るかどうかを想像し、その結果、その家具が自分の家に入るかどうかを決める場合のように、現実への関わりを持つものであった。そして、そのような感覚的経験の想像の現象的性格を説明できるのが、選言的アプローチだった。

一方、ノードホフによれば、マーティンのように、依存性のテーゼを維持する一方で、選言的アプローチをとることにより、上記のような想像的経験の認識論を理解しようとする立場は不適切であった。彼によれば、依存性のテーゼが正しいならば、想像された世界について観念論が主張されるべきであり、それは選言主義と矛盾するのであった。

以下では、上記のような論争の構造を踏まえうえで、まず、依存性のテーゼの正しさについて考察し、その後で、依存性のテーゼと選言主義の関わりについて考察したい。

5. 考察

最初の問題は、依存性のテーゼが正しいと言えるかどうかである。ここでは、まず、ノードホフが想像的企ての本質の考察によって行った依存性のテーゼの批判の妥当性について考察し、その後で、彼の想像的経験・心的イメージの本質の考察による依存性のテーゼの妥当性について検討したい。

ノードホフが想像的企ての本質の考察によって行った依存性のテーゼの批判の一つ目と二つ目のものは、多様使用のテーゼが成り立つことを前提とするならば、心的イメージ以外に想像的企てを区別するほかの要因がなければならないという考えに基づくものだった。彼によれば、成功した想像的企ての場合は、その要因は意図であり、その意図は、想像している人自身の自分の意図についての知識によって決定されるのであった。しかし、われわれは、椅子を知覚していると想像しようと思図しなくとも、椅子を想像することを意図することができるので、対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はないのだった。けれども、想像的企てがすべて意図通りに行われるとは限らない。成功しない想像や意図的でない想像もある。それゆえ、彼は、成功した想像的企て以外の場合も考え、以下のように論じていた。

- (1) 主体Sは自分が対象Fを想像していると仮定することができる。
 - (2) 想像することは、イメージが独立して持つ意図的な性質、もしくは、イメージの背後にある仮定によって与えられた内容より豊かな内容を帰せられるべきではない。
- それゆえ、
- (3) 対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はない。²⁸

彼によれば、(1)は、すべての人が、依存性のテーゼを受け入れているわけではないという単純な事実から生じていた。そして、この仮定からの議論が示していることは、イメージがどのように生じるかに関する仮定が想像的企ての内容を決定できるということであった。

これらの依存性のテーゼへの批判は、適切なのだろうか。まず、成功した想像的企ての場合から見てみたい。この場合の第一の問題は、「意図」をどうやって確定するかが不明瞭なことである。一つの考えは、本人が「意図している」と言うかどうかによって、意図を確定しよ

うとするものだろう。その考えによれば、誰かが、「私は、椅子を知覚していると想像しようと思図することなく、椅子を想像することを意図することができる」と言うならば、その人は、そう意図していることになるのである。しかし、それを確かめる術はない。そのように主張している人がいるということだけで、その考えが正しいとするならば、逆に、椅子を想像する際に椅子を知覚していると想像していると主張する人もいる。結局、議論は、出発点に戻るだけである。もちろん、ここで言われているのは、「対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はない」ということだけであって、そのような場合がないと言っているのではないと主張することはできるかもしれない。しかし、その場合でも、依存性のテーゼが間違っているということを示すことはできない。せいぜい、依存性のテーゼも率直な見解も同程度の適切さを持っていると言えるだけである。事態は、成功した想像的企て以外の場合でも同様である。ノードホフは、すべての人が依存性のテーゼを受け入れているわけではないということを根拠に、「対象を想像することは、対象の知覚的経験を想像することである必要はない」ということを主張している。それは、明らかに論点先取の過ちを犯しているように思えるのである。依存性のテーゼを受け入れている人もいれば、率直な見解を受け入れている人もいるというだけの主張であるならば、ここでも言えることは、せいぜい、依存性のテーゼが率直な見解より優れているとは言えないということだけである。

ノードホフが想像的企ての本質の考察によって行った依存性のテーゼの批判の三つ目のものは、自閉症の人や幼児や動物は知覚的経験という概念を持っていない一方で、想像するという能力は持っているように思えるということに基づくものであった。彼によれば、知覚的経験という概念を持たずに想像する事例があるので、想像することが知覚的経験の概念の所有だと考える依存性のテーゼは間違っているのであった。

しかし、このような依存性のテーゼへの批判もうまくいかないように思える。まず、第一に、依存性のテーゼの主張者が「想像している人が、少なくとも暗には、自分達が知覚的経験を想像していると仮定している」²⁹と主張する必要は、必ずしもないように思えるからである。「感覚的に ϕ を想像することは、 ϕ を経験していると想像することである」³⁰という主張は、それを意識しているということをも必然的に含む必要はない。本人が無自覚に知覚的経験を想像しているとも考えることもできる。われわれは、自分は気付いていなかったが本当はし

かじかだったというような事例を持っている。例えば、足をぶつけてあざができていたから本当はそのとき痛みを感じていたはずなのに、そのときは痛みを感じていなかったという事例はある。だとしたら、ノードホフの二つ目の批判も、確実なものではないのである。もちろん、ここで、無自覚的に知覚的経験を想像しているのか、それとも、そもそも知覚的経験ではなく対象を知覚しているのかはわからないという反論はありうる。そして、その反論はもっともである。しかし、そこで言われることも、先の一つ目の批判についての考察の場合と同様に、依存性のテーゼも率直な見解も同程度の適切さを持っているということだけである。

以上が、依存性のテーゼの正しさについてのマーティンの論拠とは独立に、ノードホフが想像的企ての本質の考察により行った依存性のテーゼの批判の妥当性について考察である。次に、想像的経験・心的イメージの本質の考察による依存性のテーゼの妥当性についてみてみたい。彼によれば、心的イメージの特徴に関して、依存性のテーゼを主張する人が、依存性のテーゼならうまく説明ができると主張しているのは、次の三つであった。

- (I) Fの心的イメージは、ある視点からのFの表象である。
- (II) 心的イメージは、知覚的経験の場合とは違って、感覚的質の提示 (presentation) を含まない。
- (III) 同じイメージは、一つ以上の想像的企ての役に立つ。たとえば、Fを想像することとFの知覚的経験を想像すること。³¹

ただし、彼は、依存性のテーゼを主張する人が三つすべてを主張するべきだとは言っていない。そのうち (I) と (II) を依存性テーゼがうまく説明できるということによって、依存性のテーゼを擁護しようとしていたのが、マーティンだった。(III) に関しては、ノードホフは、それを主張している依存性のテーゼの主張者として、ピーコックを考えていた。

ノードホフによれば、それらの諸特徴を説明するために、依存性のテーゼが一番相応しいということにはなかった。(I) については、心的イメージがある視点からのものであると認めたとしても、その事実は、感覚知覚の様態は感覚的に想像することの様態と現象的に似ているという、似た内容の仮説をとるならば、説明できる。(II) についての依存性のテーゼの説明は、感覚の様態には様々なヴァリエーションがあり、Fを想像する場合とFの知覚的経験を持つ場合の現象的な違いにもヴァリ

エーションがあるということを見無視しているので適切ではない。(III) についても、多様使用のテーゼは、依存性のテーゼだけでなく、似た内容の仮説でも説明できる。彼はそう論じるのである。そして、心的イメージの諸特徴を説明するために依存性のテーゼは必須ではないので、知覚的経験の本質を考察するなら依存性のテーゼが適切だと考える必要はないというのが彼の考えだったのである。

(I) と (III) が、依存性のテーゼだけでなく、似た内容の仮説でも説明できるというノードホフの主張は、もっともだと思われる。しかし、ここで言われていることは、あくまで、依存性のテーゼ以外のやり方でも説明できるので依存性のテーゼが必須ではないということである。たとえば、似た内容の仮説が率直な見解を支持するものであるとしても、どちらでも説明できるということは、依存性のテーゼが間違っているという主張でも、率直な見解が正しいという主張でもない。

(II) については、確かに、マーティンは、かゆみの想像とかゆみの知覚の場合と、視覚的経験と視覚的想像・視覚化の場合に同じことが言えるということのはっきりした根拠を示していなかった。それゆえ、ノードホフが言うように、心的イメージが知覚的経験の場合とは違って感覚的質の提示を含まないということが、依存性のテーゼによって全面的に説明できるかどうかは明らかではない。しかし、ノードホフの側も、率直な見解が、個々の場合を考えるのに適していると主張しているだけであって、その具体的な根拠は与えられていない。それゆえ、これに関しても、指摘されることができるといえるのは、依存性のテーゼも率直な見解も根拠の点では優劣がないということだけである。

これまで、依存性のテーゼの妥当性の問題について、ノードホフが想像的企ての本質の考察により行った依存性のテーゼの批判と、想像的経験・心的イメージの本質の考察により行った依存性のテーゼの批判についてみてきた。そして、そこで明らかになったことは、ノードホフの批判では、依存性のテーゼが間違っているとは言えないということだった。もちろん、それは率直な見解が間違いであることを示しているのではない。そうではなく、それは、ノードホフの議論で示されたのは彼の考えとは違って依存性のテーゼも率直な見解も同程度の適切さを持っているということだけだということを示しているのである。

依存性のテーゼも率直な見解も同程度の適切さを持っているということだけが示されているのだとしたら、次に問題となるのは、感覚的想像について考えることに

よって知覚の選言主義が正しいと主張したいなら、依存性のテーゼと率直な見解のどちらを正しいとしなければならないかということである。

マーティンは、依存性のテーゼを維持する一方で選言的アプローチをとることによって、想像が現実への関わりを持つものであるという、感覚的経験を想像することの現象的性格をうまく説明できると考えていた。選言的アプローチによれば、水の広がりや視覚的経験は、経験の構成要素として現実の水を含んでいる。水の広がりや視覚的経験を想像するときは、その視覚的経験の構成要素である水をも想像している。したがって、想像は現実への関わりを持つことができるのである。

それに対して、ノードホフは、依存性のテーゼを維持したまま、想像が現実への関わりを持つものであるということをも主張することはできないと論じていた。依存性のテーゼが真であるなら、Fの経験があるからFが想像的世界の部分として存在しうる。つまり、想像的世界の存在は経験の存在に依存している。そのような世界は観念論が真である世界である。そのように、依存性のテーゼは想像された世界についての観念論を含むと考えられる。それに対して、選言主義者は心から独立した世界があると考えている。それゆえ、依存性のテーゼを維持したまま選言的アプローチを取ることはできない。そう彼は論じていたのである。彼によれば、ここで、経験は世界が主体に表している経験だとして依存性のテーゼが観念論を含むということに反論しようとするのも、うまくいかないのであった。なぜなら、経験は世界が主体に表している経験だとするためには、想像している人が、自分たちが知覚的経験を持っていると仮定して、その経験は経験の対象についてのものであると考えていなければならないが、人々は対象を想像していると考えているのであって対象の経験を想像していると考えているのではないからである。

ここでの、依存性のテーゼが観念論を含み、観念論は選言主義と矛盾するというノードホフの考えは、もっともである。しかし、ノードホフの後半の考えで、マーティンの主張を批判できるかどうかについては、多少考察が必要である。

ノードホフは、マーティンの主張が正しいためには、自分たちが知覚的経験を持っていると仮定して、その経験は経験の対象についてのものであると考えていなければならないが、人々は対象を想像していると考えているのであり、対象の経験を想像しているとは考えていないので、マーティンの主張は正しくないと言っていた。しかし、本章前半で見たように、この根拠は弱い。

人々が対象を想像していると考えているのか、対象の経験を想像していると考えているのかは、明らかではない。けれども、違った視点から、マーティンの主張を批判することもできる。つまり、マーティンの主張が成り立つためには、経験が対象についてのものであるなら、その経験を対象とする想像も対象についてのものであるということが成り立っていなければならない。しかし、この場合に、推移性³²が成り立つことの証明はない。草の長さが、今日と昨日では同じに見えたとしても、少しはその草は伸びているのであり、昨日と10日後では全く違う長さになっているかもしれない。推移性が成り立たない事例もあるのである。

以上のように考えるならば、依存性のテーゼよりも、率直な見解の方が、選言主義とうまくいくように思える。だとしたら、感覚的想像の考察によって選言主義を擁護しようとするのであれば、率直な見解が擁護されなければならないだろう。その点で、ノードホフの考えは正しいと思われる。しかし、ここで見てきたノードホフの依存性のテーゼの批判は、依存性のテーゼが間違っているということをも主張するものではなかった。そのような状況の中で、感覚的想像の考察により選言主義を擁護したいなら、より強い形で、依存性のテーゼの批判、もしくは、率直な見解の擁護が必要であるだろう。

6. おわりに

本論文では、感覚的想像についての考察を手がかりに選言主義と非選言主義のどちらがわれわれの知覚についての適切な意見なのかを考えようという見解について、マーティンとノードホフの議論を見ることにより考察してきた。その結果、選言主義と依存性のテーゼは矛盾するように思われるという点では、感覚的想像について、依存性のテーゼの擁護により選言主義の適切性を主張しようとするマーティンの考えより、率直な見解の擁護により選言主義の適切性を主張しようとするノードホフの考えの方が、見込みがあるように思われた。依存性のテーゼより率直な見解の方が適切だと示せるならば、知覚についての選言主義を擁護できる。けれども、同時に、ノードホフの議論では、依存性のテーゼより率直な見解の方が適切だということは示せないということも明らかになった。つまり、感覚的想像についての考察を手がかりに、知覚についての選言主義の適切性を主張するためには、ノードホフの議論よりもより強い形で、依存性のテーゼより率直な見解の方が適切だということを示さなければならないということが明らかになったのであ

る。どのようにしてそれを示すことができるかは、今後の課題である。

注

1. Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 10. 斜字体原著者。なお、翻訳は著者による。以下同様。
2. 事実の知覚についての選言主義。McDowell, J. *Criteria, Defeasibility, Knowledge*. *Proceedings of the British Academy*. Read 24 November, 1982, p. 455-479. 参照。
3. Putnam, H. "Mind and Body". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 129. ここでの()内の補足は筆者。
4. Fish, W. *Disjunctivism and Non-disjunctivism: Making Sense of the Debate*. *Proceedings of the Aristotelian Society*. Vol. 105, 2004, p. 119-127. フィッシュ自身は、スノードン流の対象についての選言主義(Snowdon, P. *Perception, Vision and Causation*. *Proceedings of the Aristotelian Society*. New Series Vol. 81, 1980/81, p. 175-192. ・Snowdon, P. *The Objects of Perceptual Experience*. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp. Vol. 64. 1990, p. 121-150. 参照)を特徴づけようとしているが、彼の提案は、マクダウエル流の事実についての選言主義にも同様に当てはまる。この点についても論じられるべきであるが、本論の趣旨からはずれるので、ここでは論じない。フィッシュの提案自体の妥当性についても、ここでは論じない。それらは、別のところで論じられるべきである。
5. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. *Mind & Language*, Vol. 17, Nov. 4, September, 2002, p. 276-425.
6. Noordhof, P. *Imagining Objects and Imagining Experiences*. *Mind & Language*, Vol. 17, No. 4, September, 2002, p. 426-455.
7. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 377.
8. マーティンは、志向的アプローチをとる人物として、タイを挙げている。タイは、「視覚的クオリアと視覚的内容」(Tye, M. "Visual Qualia and Visual Content". *The Contents of Experience: Essays on Perception*. Crane, T. ed. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p. 158-176.)の中で、海の青さを経験している状況を例に、自分の立場を説明している。彼によれば、内省をしても、視覚的クオリアはなく、自分が海の青さを経験するとき、私は青を私の経験の性質としてではなく、海の性質として経験しているのであり、私の経験は、海を青として表象している経験である。
9. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 377.
10. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 378.
11. *Ibid.* p. 378. 表象的アプローチが知覚の透明性をどのように説明するかに関しては、信原幸弘、知覚の透明性. *思想*. no. 986, 2006, p. 4-26. で、詳しく論じられている。
12. 小口峰樹は、2007年第40回日本科学哲学会発表原稿の注で、マーティンのように志向的アプローチと選言的アプローチを対立するものとして扱う哲学者ばかりがいるのではなく、マクダウエルの場合は両立しうるのではないかと指摘している。
13. ここでは、後に論じる依存性のテーゼを考えた場合、志向的アプローチと選言的アプローチのどちらが適切かという問題に焦点を当てたいので、センスデータのアプローチで現象的透明性が説明できるかどうかについて詳しく論じることはしない。また、表象的アプローチが知覚の透明性をどのように説明するかに関しては、信原幸弘、知覚の透明性. *思想*. no. 986, 2006, p. 4-26. で、詳しく論じられている。
14. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 404.
15. マーティンは詳しく論じていないが、視覚化について言えることが、他の感覚の場合にも言えるかどうかには、議論の余地がある。ただし、本論文ではそれについて論じない。それについては、他で論じられるべきである。
16. Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 409.
17. *Ibid.* p. 414.
18. Peacocke, C. "Imagination, Experience and Possibility". *Essays on Berkeley: A Tercentennial Celebration*. Foster, J.; Robinson, H. ed. Oxford, Clarendon Press, 1985, p. 19-35.
19. Noordhof, P. *Imagining Objects and Imagining Ex-*

- periences. p. 427.
20. Ibid. p. 427. 彼は、ウィリアムズ (Williams, B. "Imagination and the Self". Problems of the Self. Cambridge, Cambridge University Press, 1973.) のように、想像の世界の部分ではない知覚的経験を想像していると考ええるような、依存性のテーゼと率直な見解の中間の立場があることを認めるが、そこには、問題があると言っている。しかし、ここでの問題は標準的な依存性のテーゼと率直な見解のどちらがより適切かを考察することであるので、中間的立場の適切性についてはここでは論じない。
21. Noordhof, P. Imagining Objects and Imagining Experiences. p. 428.
22. Ibid. p. 430-431.
23. Ibid. p. 433.
24. 彼は、心的イメージと想像的経験を相互に置換できるものとして扱っている。
25. Noordhof, P. Imagining Objects and Imagining Experiences. p. 438.
26. パースペクティブ的な本質については、一つの主題として、別のところで詳しく論じられるべきである。
27. Noordhof, P. Imagining Objects and Imagining Experiences. p. 448.
28. Ibid. p. 433.
29. Ibid. p. 436.
30. Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. p. 404.
31. Noordhof, P. Imagining Objects and Imagining Experiences. p. 438v
32. ここでは推移性で、A と B がある関係にあり、B と C が同じ関係にあるとしたら、A と C も同じ関係にあるということを意味している。たとえば、 $A = B$ 、 $B = C$ なら $A = C$ は、推移性が成り立っている。
- Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. *Mind & Language*, Vol. 17, No. 4, September, 2002, p. 276-425.
- McDowell, J. Criteria, Defeasibility, Knowledge. *Proceedings of the British Academy*. Read 24 November, 1982, p. 455-479.
- Noordhof, P. Imagining Objects and Imagining Experiences. *Mind & Language*, Vol. 17, No. 4, September, 2002, p. 426-455.
- 信原幸弘. 知覚の透明性. *思想*. no. 986, 2006, p. 4-26.
- 小口峰樹. 知覚経験の選言説と概念説. 2007, 第40回日本科学哲学会発表原稿.
- Peacocke, C. "Imagination, Experience and Possibility". *Essays on Berkeley: A Tercentennial Celebration*. Foster, J.; Robinson, H. ed. Oxford, Clarendon Press, 1985, p. 19-35.
- Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam, H. (野本和幸監訳) 心・身体・世界：三つの撚り糸／自然な実在論. 東京, 法政大学出版局, 2005.)
- Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 1-70.
- Putnam, H. "Mind and Body". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 71-133.
- Snowdon, P. Perception, Vision and Causation. *Proceedings of the Aristotelian Society*. New Series Vol. 81, 1980/81, p. 175-192.
- Snowdon, P. The Objects of Perceptual Experience. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp. Vol. 64. 1990, p. 121-150.
- Tye, M. "Visual Qualia and Visual Content". *The Contents of Experience: Essays on Perception*. Crane, T. ed. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p. 158-176.
- Williams, B. "Imagination and the Self". *Problems of the Self*. Cambridge, Cambridge University Press, 1973.

参考文献

- Crane, T. ed. *The Contents of Experience: Essays on Perception*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992.
- Fish, W. Disjunctivism and Non-disjunctivism: Making Sense of the Debate. *Proceedings of the Aristotelian Society*. Vol. 105, 2004, p. 119-127.

(平成 20 年 9 月 29 日受付)

(平成 20 年 12 月 15 日採録)